

## ●ウイスキー・ラベル物語-13

植民地で再生されたアメリカン・ウイスキー(3)  
—バーボン・ウイスキーにまつわる不思議を探る—

か 河 合 忠  
Tadashi KAWAI



## バーボンの由来にまつわる不思議

自由な新世界、アメリカでさまざまなウイスキーが造られていることはすでに述べたが、しかしアメリカンを代表するのはバーボンであり、圧倒的な生産量を誇っているが、いくつかの不思議な事実がある：

- バーボンの語源は、ケンタッキー州バーボン郡に由来しているが、その郡の名称は当時のフランス王朝ブルボン家 (The Bourbon) に由来している。なぜフランス王朝の名が新大陸の郡の名となったのか？
- 他のウイスキーは国 (例えば、アイリッシュ、スコッチ、カナディアン、ジャパニーズなど) や原料 (例えば、モルト、ライ、コーンなど) の名前が付けられているのに、なぜバーボンだけが一地方 (郡) の名が冠されているのか？
- 現存するケンタッキー州バーボン郡でなぜバーボンが造られていないのか？
- テネシー・ウイスキーは本当にバーボンなのか？酒税法の中の分類で、テネシーはバーボンに含まれているのに、瓶のラベルにはバーボンとは書いていない。テネシーについては、後に別に詳細に述べることにする。



## バーボンを造り始めたのは誰か？

現在の連邦政府による酒税の定義によって、バーボンの質を担保するために規定しているのは原料と製造についてであって、米国内外で製造することを

禁止していない。しかし、バーボンの生産は、後述するテネシー州以外は主にケンタッキー州の特定の北部地区で行われている。さらに、バーボンのうち生産地の名を冠しているのは、ケンタッキー・バーボンだけであって、ケンタッキー以外で生産されるバーボンには許されていない。

それでは、誰がいつごろ、ケンタッキーのどこで、バーボンを造り始めたのであろうか。真相は不明であるが、少なくとも2人の候補者があげられている。1人はエリジャ・クレイグ (Elijah Craig) 牧師で、1780年ごろバーボン造りを確立したとされており、日本の出版物にもそのような記述が多い。しかし、もう1人はエバン・ウィリアムズ (Evan Williams) である。近年になって、チャールズ・コウダリー (Charles K. Cowdery) がクレイグ説に異論を唱え、ウィリアムズ説を有力視している。

クレイグは、実在のバプティスト派の牧師で、彼がレバノン (Lebanon) と名づけたケンタッキーの地でウイスキー造りをし、ケンタッキーで当時幅広く活躍した一大事業家で、地域に大きな影響を及ぼしたことは事実である。彼はコーンに大麦とライ麦を混ぜて加熱し、糖分を抽出して水と混ぜ、さらにリングとプラムを入れて熟成させた後に蒸留しており、彼の造ったウイスキーは赤い色をしていたので、「レッド・リカー (red liquor)」とか「リキッド・ルビー (liquid ruby)」と呼ばれていたといわれる。それにちなんでバーボンのことをときに「アメリカン・ルビー (American ruby)」と呼ぶのかもしれない。

いずれにしてもこれがバーボンの基本的な製造法となったといわれれば否定するわけではないが、新

しいオーク樽の中で熟成し独特の香味と強い琥珀色をもった現在のバーボンの原点とは程遠いと考えられる。

クレイグ説に対する反論としてあげられているもう1つの事実がある。彼は、一度もバーボン郡に住み着いたことがないというのである。彼が居住地を変えたわけではない。前回の「ケンタッキーの歴史」の中で述べたごとく、バージニアから分離してケンタッキー州となった前後では地区の名称が三転四転したのだが、それでもクレイグ牧師は一度もバーボン郡に所属したという記録は見つからないという。前述したケンタッキーの地図がほぼ固定するまで、特に州として認められた前後は激しく地域の名称が変わり、クレイグが居住していた地域は、1780年にはラファエット郡 (LaFayette)、8年後の1788年にウッドフォード郡 (Woodford)、1792年にはスコット郡 (Scott) と変更された。1785年に誕生した当時の広大なバーボン郡 (いわゆる“Old Bourbon”) のときも、その後の細分化で決められた現在のバーボン郡にも、クレイグは住んだ証拠がない以上、“バーボンの父”とは言えないというのである。

それでは、他に誰がバーボンの生みの親なのだろうか？ 恐らくケンタッキーで最初にコーンを使ってウイスキー造りを始めたのは、1774年6月にフォート・ハロードに最初に定住した人たち、特にアイルランド系移民であったと想像できよう。というのは、開拓時代では、多くの家庭でパンを焼くと同じくらい普通に蒸留酒造りが行われていたらしいのである。しかし、フォート・ハロードにその記録が残っていない以上、次に白羽の矢が立てられているのが、エバン・ウイリアムズであって、1783年ケンタッキーのルイビル (Louisville) でコーンからウイスキー造りを本格的に始めたという記録が残っている。現に、彼の蒸留所を引き継いでいるヘブン・ヒル (Heaven Hill) は、「ケンタッキーで最初の民間蒸留所」と宣伝している。彼は、ルイビル港の港長など重要な地位を長い間勤めるなど政治的活動も活発に行い、1810年10月15日に亡くなっている。

後に、バーボンの名門として残るジム・ビーム (Jim Beam) がケンタッキーに移住したのも、独立戦争の終結が予測された1785年なのである。バー

ジニア州知事のトーマス・ジェファソンがケンタッキー地区に奨励したコーン生産が軌道に乗り始め、巨大な生産量のコーンを生かすためにも蒸留酒作りは、大麻の栽培とともに、当時のケンタッキーの主要な産業に成長したのである。



### なぜバーボンの名が冠せられたのか？

バーボン (Bourbon) の名の由来が、独立戦争のあった18世紀頃にフランス王朝を率いたブルボン家の名であったことは、前回すでに述べた。13の植民地からなる大陸会議 (The Continental Congress) がイギリス本国政府に反旗を翻して独立戦争に突入したが、フランスはそれを応援し、停戦の調停に尽力してパリ講和会議において植民地の独立をイギリスに認めさせたことに対する感謝の意味もあって、多くの地名にフランスに由来する名称を使ったのである。

バーボン郡はケンタッキー州に存在するが、現在そこではバーボンの生産は行われていない。それはなぜバーボンの生産地がケンタッキー州の北部に集中し、現在のバーボン郡で造られていないのか？

そして、なぜバーボン郡の名前がウイスキーに付けられたのか？ ケンタッキー州の歴史的背景が大きく影響している。

現在のケンタッキー州のほぼ全域を占める地域は、広大な広さをもっていたバージニア植民地のケンタッキー地区といわれていたが、ウイスキー暴動を機にアイルランド・スコットランド系の移民が大挙して移動した。しかも、コーン生産を義務付けられたことで、従来ライ麦を中心のウイスキー造りからコーンを主原料とするウイスキー造りを工夫して独特の香味を生み出したのである。

1780年にはケンタッキー地区の区画整理が始まり、1785年までにバーボン郡を含めて5つの郡が誕生した。それでも、1つひとつの郡は大きな地域を占めており、州となってからさらに細分割が進み1800年までに43郡に分割され、ほぼ現在の大きさのバーボン郡へと縮小された。その後も数十年間は、初期の広大なバーボン郡に含まれていたケンタッキー州の北部、東部と東南部 (現在のケンタッキー州の実に34郡を含む) が“Old Bourbon (古きバーボン郡)”の愛称で呼び続けられたというわけ

である。

こうした土地区画整理を伴った激変するケンタッキー州誕生前後に、ウイスキー生産がケンタッキーの主要な産業となり、オハイオ川(The Ohio River)の最も古い港、当時バーボン郡に含まれ、現在はバージニア州メイソン郡にあるライムストーン(Limestone)から大量のウイスキー樽が蒸気船によって運び出された。しかも、他の生産地で造られるウイスキーと区別するために、この地域から運び出されるウイスキー樽には“Old Bourbon Whiskey”と刻印されて出荷されたのである。その当時は、「Old Bourbonで造られた Whiskey」というほどの意味であったが、数十年を経過して1840年頃からは、上記の歴史的経緯が忘れられて、単に“bourbon”と呼ばれて、コーンを主原料とする独特の香味をもったバーボン・ウイスキーの名称が自然発生的に固定化していったというわけである。当時、東部では主としてライ・ウイスキーが造られていたので、それらと区別する意味でも西部の人たちによって誇らしげに「バーボン」と愛称されていた。

ケンタッキー州北部がバーボンの生産地として定着したことについては、もう1つ当時交通至便であったことも大きな要因であろう。すなわち、主にバーボンが運び出されたケンタッキーの最初の重要な港湾都市ライムストーン(古くはメイビルと呼ばれていた)は、古く1784年から開港し、バージニア政府は2名の海軍軍人を常駐させて交通整理と通行税の徴収に当たらせたとの記録がある。前回の地図にもあるように、ペンシルベニア州のピッツバーグで合流した2つの川がオハイオ川となり、オハイオ州を南西に突き抜けて、シンシナティを経てケンタッキー州の北の州境を西に流れ、さらにテネシー州の西の州境を下る全長1,580kmにわたる。それがミシシッピ州に入るとミシシッピ川に合流し、ルイジアナ州ニューオーリンズを経てメキシコ湾に到達する。この一大交通路を蒸気船が行き交いウイスキー、大麻など多くの商品が運ばれたために、バーボンは販売網を広げることができたのである。



#### ウイスキー販売から大統領になったリンカーン

アメリカ合衆国の歴史の中で、ウイスキーに関連した大きな出来事として、独立戦争後のウイスキー

暴動(The Whiskey Rebellion)に次いで、南北戦争前後の節酒運動(The Temperance Movement)からエスカレートしていった禁酒法(The Prohibition)の発効があげられる。禁酒法の背景については次回に詳しく述べるとして、ここでは個人的にもまた政治的にもケンタッキー・バーボンと深く関わっていたアメリカ合衆国第16代大統領、アブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln, 1809~1865)について触れなければならないだろう。初代大統領ジョージ・ワシントン自身がウイスキー造りをしてきたことは既に述べたが、リンカーンの場合はさらに深い隠れた関係があった。

リンカーンはケンタッキーの小さな丸太小屋で誕生し、今では「リンカーンの生家」として観光スポットとなっているが、現在展示されている丸太小屋が本物かどうかについては疑問視されている。彼の父トーマス(Thomas)、母ナンシー(Nancy)は1808年、200ドルで348エーカーの農場(Sinking Spring Farm)を購入した。当時、母のナンシーは“将来の大統領”を妊娠していたという。父は、近くの蒸留所の季節労働者として主に樽作りなどに従事し、アブラハムは父に弁当を届け、父の仕事の雑用を手伝っていたという。1811年、農場の所有権のトラブルから、近くのノブ・クリーク(Knob Creek)に移り、5歳までケンタッキーに住んだ。少年時代の思い出の中で、通学途上に雨で増水した川に流され、溺死寸前に同級生の1人、オースチン・ゴラハー(Austin Gollhar)に助けられた、と述懐している。リンカーン家2番目の丸太小屋のレプリカが、ノブ・クリーク農場跡に建てられている。また、リンカーン大統領の少年時代にあやかっただけか、バードタウン(Bardstown)にあるジム・ビーム蒸留所が近年になってケンタッキー・ストレート・バーボン「KNOB CREEK」を発売している(写真1)。

リンカーン家は、その後ケンタッキーから西部のインディアナに移住したが、アブラハムが10歳のとき、母ナンシーが亡くなり、父は再婚した。彼が21歳のとき、リンカーン家はイリノイ州のスプリングフィールドに近いニューサーレム(New Salem)に移住した。雑貨店の事務員をしながら独学で弁護士資格を取ったアブラハムは大統領になるまでイリノイ州で過ごした。



写真1 KNOB CREEK Kentucky Straight Bourbon Whiskey

リンカーン大統領の父が働いていた蒸留所があったノブ・クリーク(小山のある小川)はリンカーンが少年時代を過ごした町である。後に蒸留所がバーズタウン(Bardstown)に移転し、古くからジム・ビーム蒸留所の本拠地があり、1993年からバーボン・フェスティバルが開かれている。ジム・ビーム社が、リンカーンの少年時代にあやかっただけで、近年になってブランド化した。

1832年に州議会議員選挙に敗れた後、彼は仲間とともに酒類販売店の免許を取得し、居酒屋を開いたが、彼の免許には「黒人、インディアンや子供へのウイスキー販売の禁止」要件が含まれていた。その後、さらに2つの居酒屋を買収したが、これらの店舗については、後に激しくなった節酒運動(temperance movement)のために、「雑貨店(grocery)」として記録されているが、実際は酒類の販売が主たるものであったらしい。当時、飲酒、特に居酒屋での飲酒はほとんど男性に限られており、奴隷廃止運動(abolitionist movement)、婦人参政権運動(women's right movement)と併せて節酒運動は主として婦人運動家によってその激しさを増していた。政治家となったリンカーンは、1847年に連邦議会議員に当選し、共和党の創設に参加し、ついに1860年第16代連邦大統領に当選した。彼の政治家としての立場は微妙であり、共和党員として奴隷廃止運動を進める一方、酒類販売業者として基本的には「禁酒活動団体には所属しないが、“しらふ”(酒無し)の生活スタイルを奨励する」という曖昧なものであった。現在ではこうした見解は常識とも言えるが、議会内でも飲酒が公然と行われていた当時であって、禁酒活動家と愛飲家とに対して二股をかけた形となった。

大統領に就任したリンカーンは、共和国を維持することを優先的に考え、奴隷廃止に反対する南部連



写真2 北軍を勝利に導いたU.S. グラント将軍

彼は、後に第18代大統領に就任した。



写真3 U.S. グラント将軍が好んだ OLD CROW Kentucky Straight Bourbon Whiskey

スコットランドから1825年にケンタッキーに移住した医師で薬剤師のジェームズ・クロウ博士が雇われた蒸留所で、サワー・マッシュ方式を確立した。クロウ博士が亡くなった1856年の10年ほど後に彼と一緒に働いていた友人たちによりオールド・クロウ蒸留所が建設された。禁酒法が施行された1920年に一時操業を中止したが、現在はナショナル・ディステイラリーズ社により買収されて、人気を保っている。Crowはカラスを意味することからカラスをシンボルマークに使っている。

合(The Confederate States)との間で南北戦争(The Civil War)に突入し、勝利を収めた。連邦政府軍(北軍)を率いて勝利の原動力となったグラント将軍(General Ulysses S. Grant)(写真2)は、ケンタッキー・バーボン、とりわけオールド・クロウ(OLD CROW)(写真3)を愛飲することで有名を馳せており、節酒運動に対するリンカーンの立場を批判していた。しかし、リンカーン大統領は勝利の祝いとして将軍にオールド・クロウを贈ったという。図1に示すように、南北戦争時、南部連合は11州からなり、両軍の衝突した部分がウイスキー生産の中心地であり、一説には、資金が豊富な北軍が、戦場でウイスキーを大量に振舞ったことが勝利



図1 南北戦争時の連邦政府と南部連合の勢力分布

南部連合は、バージニア(Va)、ノース・キャロライナ(NC)、サウス・キャロライナ(SC)、ジョージア(Ga)、フロリダ(Fla)、テネシー(Tenn)、アラバマ(Ala)、アーカンサス(Ark)、ミシシッピ(Miss)、ルイジアナ(La)、テキサス(Texas)の11州からなっていた。



写真4 南軍のR.E. リー将軍

バージニア出身のリー将軍自身は、南北戦争以前に自分の奴隷を解放し、連邦離脱に反対していたが、バージニア州が南部連盟に加わったことから、北軍からの勧誘を断って南軍の指揮官となり、北軍に降伏した。戦後は、ワシントン校(現在のワシントン・リー大学)の学長を務めた。彼の家は北軍により奪われ、現在はアーリントン国立墓地の一部となっている。

に導いたといわれているが、真実はどうであったろうか。後に世界に君臨した少年ジャック・ダニエル(Jack Daniel)は、テネシーの蒸留所でウイスキー造りを続け、戦場の真ただ中という地の利を生かして両軍に大量のウイスキーを持ち込み大儲けしたという。グラント将軍は後に第18代大統領(1869～1877)に就任したが、彼自身が飲酒によってトラブルを起こしたわけではないが、愛飲家の彼を取

り巻く側近たちによるウイスキー・スキャンダル(The Whiskey Ring)に巻き込まれ、禁酒運動家の激しい非難の的となった。

南北戦争に勝利し、南軍のリー将軍(Confederate General Robert E. Lee)(写真4)が降伏した5日後、リンカーン大統領は、1865年4月14日、ワシントンDCの劇場観客席で、南部信奉者で俳優のブース(John Wilkes Booth)によって暗殺された。